

La Informilo de Nagoja Esperanto-Centro

センター通信 282 24 nov. 2016

発行:名古屋エスペラントセンター Nagoja Esperanto-Centro
461-0004名古屋市東区葵一丁目26-10ユニーブル新栄301号
公式サイト <http://nagoja-esperanto.a.la9.jp/>
Facebookページ <https://www.facebook.com/nagoja.esperanto>



日本エスペラント大会での出店風景 (9頁参照)

目次

| | |
|----------------------------------------------------|----|
| ザメンホフ祭へのご案内..... | 2 |
| So Gilsu さんを名古屋に迎えて (山口真一) | 3 |
| エスペラント訳聖書をヴォーリズ学園に贈呈 (山田義) | 6 |
| 日本大会への出店の報告 (鈴木善彦) | 9 |
| 雑誌目録をホームページで公開 (猪飼吉計) | 10 |
| Post Jaroj (Folkmar Koller) / 磯部晶策さん略歴 (編集部) | 11 |
| 活動日誌・編集後記..... | 12 |

ザメンホフ祭へのご案内
皆様のご参加をお待ちしております

2016

Zamenhofa Festo

ザメンホフ祭

2016年12月17日 (土)

第一部 午後2時半より
名古屋エスペラントセンター
事務所にて
会費 500円

第二部 午後6時より
「ホームメイドキッチン ぼろ」
会費 4500円 (コース・飲み放題)
要予約 (12月12日まで)

PROGRAMO

10分間スピーチ

参加者募集中
賞品あり

電子紙芝居
Gon-Vulpo

世界エスペラント
大会へ行こう

本の紹介

など。。。

参加申込み
山口 真一
メール syam-z@wa2.so-net.ne.jp
電話/fax 052-807-1198
468-0026 名古屋市天白区土原3丁目205番地

参加記念品
por pli da kantado

主催 名古屋エスペラントセンター 名古屋市東区葵一丁目26-10 ユニープル新栄301号

So Gilsu さんを名古屋に迎えて

山口真一

私が初めて海外に出たのは1982年、23歳のときでした。行き先は韓国。今からすると隔世の感がありますが、当時「近くて遠い国」と称されていました。韓国に行く人の多くは仕事上か、ないし特殊な目的に限られていたのです。名古屋からの空の便はなく、航空運賃も高かったので、私は下関からのフェリーを利用しました。第1回日韓青年エスペラント共同セミナー（Komuna Seminario、以下KSと略）に参加するのが目的です。

1979年、当時TEJO（世界青年エスペランチスト機構）会長だったAmri Wandelさんは韓国と日本各地を歴訪し、世界レベルでの青年運動の振興のため、孤立していた日韓両国の青年学生エスペランチストたちが交流を持つように説得して回ったのです。松本市の私の下宿にも一泊していきました。彼の根回しの甲斐あって、その3年後の夏、ソウル郊外の雪岳（ソラク）山麓の小学校校舎を会場にしてKSは開かれました。

第1回KS参加者のうちには、現在でもエスペラント運動の第一線で活躍している人たちが少なくありません。センター委員の堀田さんもその一人です。この当時はRondo Harmonia（日本語名：国際語教育協議会、以下RHと略）が、既存のエスペラント団体とは一線を画するかたちで、青年学生エスペラント運動の中心的担い手になっていました。そして私はRHの一員として、KSのテーマの一つである“Por kio ekzistas Esperanto?”（エスペラントは何のために存在するのか）と題するシンポジウムでパネリストのひとりとして立つことになりました。これがSo Gilsuさんと私のはじめての出会いでした。その時のことは私自身記憶が曖昧になっていたのですが、私の先輩のS女史が記した紀行文¹が残っていますので、少し長くなりますが引用します。ここに出てくるY君とは私のことです。

わたしたちの団体から参加したY君は、「エスペラントの理念性と実用性」と題して、運動の両輪である理念と実用を統一的にとらえる必要性を、彼独特のいささか抽象的な論法で展開した。

昼近くなると、三十人が椅子を並べる小さな教室は耐えがたい暑さとなり、報告後の討論は戸外の木陰で行なわれることとなった。日向は灼けつく暑さだが、日陰は風がわたり意外なほど涼しい。

議論はY君の提起した問題に集中した。討論に耐える語学力を持つ数人が活発に発言し、残りは（わたしを含めて）もっぱら話の後を追いかけてながら聞く側になっていた。地面にあぐらをかいてメモを取りながら聞いていた徐

¹ 本多真理子（筆名）「韓国旅行スケッチ」『吉田民主文学』第7号（1982.11.15）

吉洙（ソ・ギルス）氏は、ややあって、若者たちの抽象的な議論を論すような口調で、

「エスペラント運動の中には、たしかに国際語の実現や世界を平和にするといった目的があるだろう。しかしわれわれがエスペラントでやれることは、実際には小さい。それが現実だ。われわれはただ、エスペラントを国際語として使うことによって、世界に愛や平和をもたらす(alporti)のではなく、憎しみや不和を追いやる(forpeli)ことができるだけではないだろうか」との意見を述べた。

彼の発言にはもちろん反論も出たが、なんとなく彼には一目置くという雰囲気が見なの間を流れる。流暢で見事なエスペラント、警抜かつユーモアあふれる言辞、ごつくばらんな人柄 — 若い人たちが彼を慕い尊敬する要件は充分である。また彼もそれをよく知っているのであろう。三十代半ばにして、韓国の青年エスペランティスト層の一方の領袖を、自らもって任ずるという風であった。

やや小太りでエネルギッシュ、巧みなレトリック、こんなSoさんは、1989年世界エスペラント協会（UEA）の幹部会員に選出され、アジア地域担当役員として手腕を振るうにいたります。

彼に再会したのは2007年、横浜で世界エスペラント大会が開催されたときで、この時は私自身が大会の別枠で主催した「Renkontiĝo de Budhanoj 仏教徒集会」（於真宗大谷派横浜別院）に参加していただきました²。25年ぶりでしたが、精悍さは相変わらずでした。

しかし2013年、レイキャビクで世界エスペラント大会で三度目にお会いした時、はじめは誰だかわかりませんでした。激やせのため顔の輪郭も変わっていました。彼は2009年、大学を退職して剃髪し、山深い寺院に籠り、一切の連絡を絶って3年間修行していたのです。食べるものは粉末にした有機玄米と生の野菜のみ、その結果体重が20kg減ったそうです。Soさんは高句麗史では権威のある学者だったため、修行を終えて山を下りた時は東亜日報が「俗世に帰ってきた高句麗学者」と題するインタビュー記事を掲載したことを、私は事前に知っていたので、驚いたというわけではなかったのですが。

そして今年10月、日本エスペラント大会前に京都を中心に奈良や名古屋の博物館・書店・寺院を回る予定だと、Soさんからメールで知らせてきました。名古屋には4日、名古屋市博物館を見学する予定だと。しかし名古屋市博物館は、どちら

² この時の経験を拙サイトに掲載しています。

http://www.nagoya30.net/temple/kyosin/sin-iti/eseo/eseo_20.html

かという地味で、尾張の歴史に興味があればいいのですが、高句麗史とはそれほど関連があるとも思えません。「何の目的で？」との私の問いに対し、「卍に興味がある。日本で卍が刻印・印字された遺物を探したい」と返信がきました。しかし市博物館には卍はなかったはず。名古屋のどこかに卍はないだろうか？学芸員に電話で尋ねたりネットで検索していると、名古屋城の石垣に卍の刻印のある石が数カ所あるようです。おそらく卍を家紋にしていた蜂須賀家が運んだ石なのでしょう。名古屋城に問い合わせた所、清正石の近くにあるはずだが、正確な場所は記録していない、とのこと。しかし探せばきっとあるはずなので、少なくともSoさんをごっかりさせることはないだろうと安心しました。4日早朝、たまたま私の所属教団（真宗大谷派）の名古屋別院のウェブサイトをなんとなくチェックしていると、卍の刻印のある石の写真を境内案内図の中に発見したのです。いそぎ名古屋別院に電話して、正確な場所を教えてくださいました。（実はこの別院はもと古渡城の跡地に建立され、名古屋城築城のさいの石の保管場所に使われていたのです。）

さて、4日午前、Soさん夫妻は単独で名古屋市博物館を見学し、私は仕事を終えて午後1時に博物館前で待ち合わせしました。案の定、博物館に卍は見つからなかったようです。Soさんが言うには、「日本の地図ではお寺を示す記号に卍が使われているので、お寺に行けばきっと卍があると思っていたけれども、違っていた」。私「これから確実に卍のある場所にご案内しますよ」。そして車で別院に乗りつけ、卍のある石を探しにかかる。知己の職員がやってきて、「山口さん、卍のある石はこっちです」と案内してくれます。そして別院の歴史に造詣の深い別の職員を連れてきて、説明をしてくださいました。名古屋城の刻印のある石をすべて網羅した図録まで見せてくれました。それをいちいちデジカメで撮りながら、「この本は古本屋できつと見つかると思う。こういう本があることが分かって、日本に来た甲斐があった」と喜んでもらい、わたしも安心したのです。

その後名古屋城でも卍刻印のある石は見つけることができました。いろいろと話を伺っていると、卍は仏教固有のシンボルではなく、もっと古い時代から世界各地で発見されていて、



名古屋城に卍を発見！（写真の右上部）

太陽をかたどった普遍的なシンボルともいえそうです。これについての研究成果をSoさんは近いうちに出版したいのだそうです。

日泰寺仏舎利奉納塔を参拝の後、名古屋エスペラントセンターに夕方到着。来名の件は直前に分かったため、エスペラントセンターとしての歓迎会はできませんでしたが、有志に集まっていただきました。中山欽司、山本修、鈴木善彦、堀田裕彦、猪飼吉計、前田可一、山田義のみなさんです。センター事務所で雑談を交わしました。特に北朝鮮情勢や南北朝鮮統一の可能性について。来年はソウルで世界エスペラント大会が催されますが、恒例の大会前観光として、板門店を考えているとSoさんはいいます。いわく、「ソウルから板門店に向うツアー、そして北京から平壤を経由して板門店に向うツアーの二つを用意する。そして板門店でエスペランティストたちが南北に別れているけれども挨拶を交わし合うことができるかもしれない。きっとマスコミにも注目されるだろう。実現にむけていろいろと手を回している」と。単なる学究肌ではない、政治手腕に長けたSoさんのことですから、可能性は充分にあるでしょう。

この後、イタリアンレストランで会食をしましたが、Soさんの食事は修行時代と変わらず、野菜でも火を通したものはダメ、わずかにシーザーサラダとジュース、あとは自分で持ち歩いている粉末玄米だけです。私にはとうてい無理です。会食では堀田さんが、第1回KSの写真を見せてくれ、懐かしい顔ぶれに喜んでいただいたことと思います。

なお、Soさんはこの後開催された日本エスペラント大会に参加し、仏教分科会に出席したり、世界エスペラント大会の件を語ったりしていただきました。



エスペラント訳聖書をヴォーリズ学園に贈呈

山田義

近江八幡はヴォーリズ学園で第103回日本エスペラント大会があった。キリスト教伝道に熱心であったヴォーリズ夫妻によって創立された学校だ。

大会委員会にキリスト者の分科会を申し込むときに、エスペラント訳聖書を学校に贈呈したいと知らせた。今回、大会会場として提供してくれるヴォーリズ学園の図書館にでも置いてもらいたいと考えてのことだ。このことで、大会組織委員会やその関係のメーリングリストで意見があった。開会式で学園長にあいさつしてもらうので、そのとき、機会を作るから渡したらどうか、大会の名で贈呈しキリスト者分科会の一人が渡したらどうだろうとか、いや大会にはいろいろな宗

教の人もあるわけだから、個人の名で渡すのがいいだろうなど。結局個人名で贈呈することになった。

大会のリープロセルヴォ（書籍販売所）で、2006年に Kava-Pech が新しく刊行した“BIBLIO”を買うことができた。開会式は日曜日の午前中だ。指定された最前列に座って、学園長にはどういうタイミングで渡せるかをこの礼拝堂の講壇を眺めて考えていた。すると係のひとりが、学園長は開会式に来れないが閉会式に出席してくださる、時間を設定するのでそこで私から贈呈してくれ、と知らせてくれた。Kongresa Libro を見ると、道城献一学園長は牧師とある。当然、日曜日に牧師が礼拝を外して大会で歓迎の言葉話すことはない。よく連絡がとれていなかったようだ。講壇の正面中央にテーブルがあり、大型聖書が目についた。講壇用聖書といい多くの教会の礼拝堂にはこのような大型聖書が大切に置かれている。そうだ、閉会式では人に手渡しではなく、この聖書台にエスペラント訳聖書を開いて献呈するのがいいだろうと一人考えた。

閉会式の前日、この学園を歩くと、玄関を入ったところに大きな本棚があり、その一角に色々な100年以上も前の歴史的聖書がガラス越しに並んでいた。1871年のゴープル訳「摩太福音書」や文語訳以前のヘボン訳ヨハネ伝の和本などとともに、ギリシャ語、ヘブライ語、英語、デンマーク語、ドイツ語のものも置いてある。生徒たちにも分かるように名札が付いて展示してある。閉会式の贈呈のときには学園長の前でこのことにも触れることにした。

贈る聖書の見開きに贈呈文を前もって書き込むこととした。「贈呈・ヴォーリズ学園へ・第103回日本エスペラント大会（2016年10月8-10日ヴォーリズ学園）参加記念 Kristano Tadaŝi Jamada 山田 義」と書き、さらに、聖書の言葉を日本語とエスペラントで添えた。「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」“Ne per la pano sole vivas homo, sed per ĉiu vorto, kiu eliras el la buŝo de Dio.”と。この本を手にした人がエスペラント語訳であることが分かりこの年にこの学園でそういう大会が開かれたのだと知り、さらにエスペラントについて検索、研究できる端緒となればと思う。

閉会式まえに出入り口で見かけた人が、大会誌の顔写真にあった道城献一牧師と分かり、「きょう、聖書を贈呈する者です」と自己紹介した。そして閉会式の冒頭、学園長はにこやかに歓迎の言葉を語った。司会者からはどの時点で壇上へ上がっていいのかわからされていなかったが、牧師の話が終わるとすぐ促しがあり、講壇に立った。贈呈の短いあいさつであるが、私には人前で話すのは慣れないことであり、メモを書いた iPad を見ながら話した。2冊の聖書を抱えて話し始めた。だが、相手がエスペランティストではないが、エスペラントを使うのが公式の場である。「Pastoro Dôzyô! kaj kara lernejo Vories-Gakuen! 」と切り出した。こういうときの呼びかけはこれで良かったのかどうか知らないが、今回

エスペラントを初めて聞いてくださる人にとってご自分とその学園のことだと分かってもらえたと思う。「Ni dankas vin ke vi donis al ni tiel belajn kongresajn tagojn」とお礼の言葉を続けた。会場の人々には分かるだろうが、見ると当のご本人には通訳をするらしい人は立っていない。日本語にしないと失礼かと、「今度の大会では大変お世話になりました」と目を合わせて「通訳」した。

そして、学園には古い本の本棚があり、いろいろな言語の聖書が大事にされていることをエス日の交互で話した。言葉好きの多い大会参加者も興味のあることだと思う。手元に持ってきた2冊を掲げ、1つは90年前英国聖書協会から発行された旧新約聖書であると紹介、そしてもう一冊は、カトリックとプロテスタントが協同で編纂した第二正典が加わった2006年の旧新約聖書であることを伝えた。聖書をよく知る牧師にはその事情はよく分かってもらえたと思う。エスペラントも世界の趨勢と共に協同の聖書翻訳が進んでいることを知ってもらいたいからだ。それを聖書台に置いてから牧師と握手して、その最後に、贈呈聖書に書き込んだ言葉をエスペラントと日本語で読み上げた。Ne per la pano sole vivas homo…「人はパンだけで生きるものではない…」と。

そのあと、JEIの鈴木恵一朗理事長が「エスペラント日本語辞典」などを記念品として贈呈した。こういう場で大会にお世話になった人、あいさつを寄せてくださった首長たちに大会を代表する人が、こういう記念品を贈るのはとてもいいことだと思った。



日本大会閉会式にて La Tagiĝo 斉唱

日本大会への出店の報告

今年（2016年）の第103回日本エスペラント大会は10月8-10日に滋賀県近江八幡市にあるヴォーリズ学園で行われました。

センター（NEC）が日本大会に出店したのは2004年に犬山市であった第91回大会以来ではないかと思われます。

今回の出店は、センターの会計が逼迫していることもあり、センターの紹介や活動内容を知らせることにより、カンパや新維持員の獲得を目指すとともに、本を売って収入を得るために、1テーブル1,000円を出して出店することがセンター委員会で決まったからです。

当初は活動を紹介するため、センターで出版した本を展示したり、在庫のある本を販売したり、パソコンでホームページを見てもらって説明をしたりする予定でした。しかし、担当者間で意思疎通を欠き、センターの出版物はほとんど持参されず、売り本もわずかしかない状態でした。

しかも、「Budoj kaj Ekspozicioj」が割り当てられたSalono 2(教育会館1階)は会場全体の奥まった場所であったため、昼食時を除き、訪問者が少ない場所で、センターも含めどのブースも大会開催中閑散とした状態でした。そのため、当初山口氏が持参したパソコンでのホームページの展示（デモ紹介）も見ることがないこと、立ち上げ時にパスワードが必要であったことなどにより、2日目にはパソコンは撤去し、本の販売のみとなりました。

本の販売実績は14点で売上は10,100円でした。品数（種類）が少なかったこと、お客さんが少なかったことを考慮すれば、割引販売が功を奏したのか、よく健闘した方かもしれません。

次回も出店するなら、もう少し計画的に準備すること、センターの紹介方法を工夫することなどが10月の委員会で反省点として挙げられました。

報告：鈴木善彦（SOJO）



雑誌目録をホームページで公開

猪飼吉計

名古屋エスペラントセンターの重要な役割に、図書館機能がある。すなわち、エスペラント関連書の収集、保存、そして公開である。収集、保存、公開には、目録がないと機能しないので、図書館には目録は必須であり、当然、名古屋エスペラントセンターも、当初から図書目録が作成されてきた。

単行本については、司書であった伊藤真理子さんが作成したカードがセンターの奥に眠っているはずであるが、途中から作業は途絶え、今日に至っている。いわば、単行本に関しては、けっきょく元の木阿弥に帰した状態なので、厳密には未整理のまま、棚ごとに大雑把に並べられているにすぎない。

雑誌についても、当初から雑誌の専任の委員がいて、リストが作成されていた。わたしは柘植巳知彦さんの手書き目録を引き継いだ。引き継いだ当初は、その形式を踏襲していたが、満足できない部分もあり、結局自分なりに工夫して、より厳密と思われる形式にそった雑誌目録を作成し直し、精力的に収集や、欠号の補充に努めた。とはいえ、手書きには、改定するとき不便さが付きまとうので、エクセル文書化を自分なりに工夫して、現物確認をしながら、すべてエクセル文書として入力した。単調で膨大な作業ではあった。

エクセル文書は、縦に雑誌名、横に年号、それぞれのセル内に、その年の所蔵する号の情報を入れた。年号は、およそ100年にわたる幅があったので、当時のエクセルの幅いっぱいが必要としたが、そもそもの目的が記録であり、コンピューター画面上での操作のみを目的としていたし、そもそも、わたしはエクセルにそれほど習熟していたのではなかったため、思いつきに任せた方策にすぎなかった。

しかし、のちにこの目録を、ホームページなどで公開する考えが持ち上がったが、セル内の情報などを閲覧者が開くのは煩わしさがあるし、まず第一、見やすいものではないという難点があった。ホームページでの公開は委員らの悲願ではあったが、けっきょくは、だれも本気で取り組む人はいなかった。

今回、ホームページでの公開ができたのは、ひとえに、新任の委員の堀田さんが、その道のプロであったからにはほかならない。彼の協力がなかったら、この目録はけっして日の目を見ることなく、フロッピーディスクの劣化とともに朽ち果ててしまったことであろう。まさに、悲願が現実のものになったのは、奇跡以外の何物でもないとの思いでいっぱいである。

雑誌目録へは次のURL（アドレス）から：

<http://nagoya-esperanto.a.la9.jp/biblioteko/katalogo.html>

Post Jaroj

Folkmar Koller

Antaŭ jaroj mi estis ano de la Nagoja Esperanto-Centro kaj nun volus scii, kiel la Nagoja Esperanto-Centro fartas. Ĉu profesoro Morita ankoraŭ estas ano de la Centro? Mi loĝas jam dum dek ses jaroj en Vieno en Aŭstrio, post kiam mi estis emeritigita de la Universitato Nagojo. Nuntempe mi estas ano de la Esperanto-asocioj en Vieno, en Bratislava (Slovakio) kaj en Trieste (Italio). Mi estis studinta teatroskiencon en la Universitato Vieno kaj pro la Viena teatrovivo revenis al Vieno. Kun koraj salutoj

(猪飼よりコメント) かつて名古屋大学で教鞭をとり、エスペラントセンターの会員でもあったFolkmar Koller氏より、10月27日、突然、センターの消息を尋ねる電子メールが猪飼の元に送られてきました。現在は事務所を移転し、森田さんは引き続き会員であること、猪飼が委員長になったことなどの趣旨の返信メールを送りました。

磯部晶策さん (1926-2016)

食品コンサルタントとして国際的に著名であり、『食品を見わける』（岩波新書、1977年）、『新版・食品づくりへの直言』（風媒社、1996年）、『食品を複眼で見る』（シーズ・プランニング社、2006年）などの著書がある。国民生活センター指導者講習、府県・市町村消費生活センター講習会などの講師もつとめた。

旧軍隊の病院で療養中にエスペラントを独習。Sadao James Oki (大木貞夫) 氏との文通をきっかけに、終生エスペラントとの関わりを持つに至る。名古屋の早稲田裕氏 (故人 1921-1992)、京都の藤本達生氏、斉藤英三氏 (故人 1900-1987) とともに、エスペラント文芸雑誌 L' Omnibuso を発行し、多くの散文詩や翻訳詩を発表した。

1976年、第63回日本エスペラント大会が愛知県瀬戸市で開催されるにあたり、名古屋エスペラントセンターでは記念品として、歌集 *por pli da kantado* を発行することになり、このために磯部氏が講師となって作詩・訳詞の講習会が定期的に催された（この歌集は、本年のザメンホフ祭の記念品にもなります）。2014年の第101回日本エスペラント大会（福井県小浜市）では「食品の品質や安全性の盲点」をテーマに公開講演し、これが公なエスペラント活動の最後となった。（編集部）

活動日誌（9月から11月）

- 9月10日（土）Konversacia Rondo（流会）
9月14日（水）センター委員会：出席7人
9月27日（火）読書会：参加者5人
10月4日（火）韓国からSo Gilsu教授が訪問
10月8日（土）～10日（月）日本エスペラント大会に出店
10月20日（木）センター委員会：出席5人
10月26日（水）読書会：参加者6人
11月12日（土）Konversacia Rondo：参加者3人
11月22日（火）読書会（予定）
11月24日（木）センター委員会（予定）

▶訂正とお詫び

前号のセンター通信において、故磯部晶策さんのお名前の「策」の文字を誤った漢字にうっかりあてた箇所がございました。さらに、「磯部さん」と記すべきところを「さん」が脱落していた箇所がございました。いずれも、編集の際にじゅうぶんな校正をしないまま印刷したことによるものです。関係各位には、大変なご迷惑と心配をおかけしました。ここに編集部から、謹んでお詫び申し上げますと同時に、以後、同様の間違いのないように厳正な校正に努めてまいりたいと思います。

▶編集担当をおりて

「センター通信」の編集の担当を委員会で猪飼吉計さんに代わってもらった。今までの「センター通信」をフォルダーに綴じていた鈴木善彦さんが、山田が編集をするようになってからもう10年にもなることに気づいた。私も驚いている。これからは、写真原稿を送ったり、Facebookで書くような時々の話題を原稿として書いて投稿することにしたい。（2016年10月24日 山田 義）

▶編集後記

センター通信282号をお届けします。伊藤俊彦さんに厳正な校正をお願いしました。また、版下作成については、専用ソフトを使い慣れている山口さんをお願いしました。センター通信は、多くの人の尽力と、読んでくださる方々からの励ましとで支えられています。それでは、ザメンホフ祭でまたお会いいたしましょう。（猪飼吉計）